

精神発達遅滞幼児の治療教育過程の研究

II 保育者の動きの側面

研究第8部 松 沢 孝 博

はじめに

保育にかかわる者として、日常の保育の中でどのように動いていいか、あるいは子供との関係をどのように発展させていいかわからない困惑の時が多々ある。他の保育者の動きを見た時、ちょっとした保育者の動きが子供の動きを変化させたり、発展させたりすることがある。その様子を見て、それを自分の動きの中に取り入れてもうまくいかないことが多く、ついには全くどうしてよいかわからなくなる。ほとんどの場合、子供との関係の発展を考えつつも、その関係は困惑感を持ちはじめた時の状態と変わらないままで過してしまうことが多いのである。そんな困り切っている私に光を当ててくれるのは子供達である。

その子供達から教えられ、またそこで保育者としての私に変化し、そして子供との関係が変化していくのである。そしてしばらくしてみると以前の私ではない私がそこにいるのに気付くのである。これから、過去において私にとって一つの困惑状態（それ程長くもない保育時間なのに“抱っこ”ばかりしてと思い、そこでなんとかしなければという焦りのある状態）があり、それに光が当てられていった経過を述べる。

一 関 — 保育者としての私の困惑状態

私にとって困惑状態が生ずると、早く自ら活動してほしいし、いろいろ楽しいことがあることも知ってもらいたいし、また私にとって長時間になると“抱っこ”も重くてつらくなるということで、何とか子供の興味のあるようなおもちゃを差し出してみたり、新しい場面に連れていったり誘うことを試みたのである。しかしほとんどそれは失敗し、拒否されたり無視されたりするのが常であった。そこには子供のその時の気持ちをくみ上げる努力もせず、子供を引っぱったり、操作したりするような焦る自分がある。そんな自分に気付くと保育者としての私の動きは止まってしまう。私は万策尽きた感じやら、

自信喪失の感を深めるやらで、どうしたらよいかわからず、仕方なくという形で子供を抱き、べったりくっついて過すことが多かったのである。

Aの場合（3歳、男児）

来園して初めての日、最初に出会った私は何とかAとの関係をとりもとうとしていろいろ誘いをかけてみる。お母さんからすぐ離れはしたので安心はしたものの、誘いに応じるどころか私のひざの上で丸まってしまったのである。おもちゃをもって一緒に遊ぼうとしたり、立たせてAにとって興味のある物のそばへ行ってみようとするが、そうすればするほどまるまってしまうのであった。私としては折角来園して一日中寝てばかりでは時々私のひざの上で丸まっているAに誘いをかけてみるが全く反応をみせない。これからどうしたらよいかと思案しつつ、私のひざの中で安心していられるのならそれもいいだろうと私自身自ら慰めつつ過してしまう。そんなことが2時間以上続く。するとしばらくして、ごそごそ動きはじめたので、もう大丈夫かなと思い誘いをかけてみたのである。ところが動き出したと思ったAは再び“かき”のように丸く縮こまってしまったのである。

Bの場合（4歳、女児）

朝お母さんから引き渡された時、きょうはどんな動きを見せてくれるかと期待しつつ、おもちゃの所へ一緒に行こうとする。しかしBは爪先立ちをして先に進むどころか“抱っこ”を執拗に要求してきたのである。しばらく“抱っこ”をしていたが、砂場に他の子供達がいなかったので、Bと一緒に砂遊びがゆっくり出来ると思い、Bを砂場に連れて行き私の手から降した。すると急にBは自分の頭をたたいて怒りだし、再び“抱っこ”を要求してきたのである。そこで再び砂場にすわり込んで“抱っこ”をしつづける。時々おもちゃを手渡そうとするが反応は見られない。こんなことでいいのかと思いつつ、

まんじりともせず“抱っこ”をしつづける。

執拗に“抱っこ”を要求されたり、体の接触を長時間にわたり要求された私は、仕方なく、また何をしてよいかわからないという形で子供と直接の接触を保っていたのである。またその時の子供の様子は、私の腹の中、胸の中に入ろうとしたり、私の口の中に手をどんどんつっこんできたりして、赤ん坊が母胎内に入るかのようであり、また母親のイメージを求めるかのようでもある。それなら子供に対して、私が母性にとって代ったり、母性を注ぎ出すことが出来ればよいが、それも私には実感的でないのである。そんなことから、そこにはどうしてもない私しかないのである。

— 光 — 保育者としての私に対する動きの手掛り

Cの場合(4歳 男児)

来園して数日間自ら一步も外に出ようとせず専ら部屋の中で過す。ある日他の子供達がみんな外に出て楽しそうに遊んでいるので、私もCの手をとり外に出ようとする。ところが一步外に出たとたん、ギャーとわめいて一人で部屋に戻ってしまったのである。慰めてもう一度試みるが同じように拒否されてしまった。あきらめて部屋の中でつき合うことにする。とはいうものの、興味のありそうな物に誘ったり、Cが動きたくるように場面を整えて誘いをかけてみても、外に連れだしたと同じようにギャーとわめかれて一人で部屋の中を駆け回ってしまう。そのうち彼の部屋での動きは、大きな積木を積んである上のにり、上から一つづつ落していったり、少し高くなっている所から子供用のいすを落したりすることが日課になっていた。全く誘いをかけずに数日後、いつものように積木を落すことをかなり長く続けた後、満足したかのようにまわりをながめていた。すると急に積木から降りてぐるぐると“こま”が回るように回転しはじめた。しばらくして、こんどは部屋の端から端まで何回となくまるで壁をつき破るかのようにぶつかりながら往復運動をする。丁度他の子供が通りかかったり、余りのドタンパタンという駆け足のうるささに、私は他の動きへ誘うが、またしてもギャーとわめかれてしまった。仕方なくCの往復運動を見守る。すると突然運動が止み、一目散に、両手を上げ、庭にとび出していったのである。

普通多くの場合、家は管理面が前面にある場所といえる。その圧力は子供のあらゆる生活活動範囲を狭める傾向がある。Cもそういう点では例外ではなく、団地住いのCにとっては、やはり管理面が優先せざるを得ない状

況にあると考えられる。しかし私達のグループにおいてはそのような圧力は少ないし、むしろ全身全霊をもって動くことの出来る場所である。それはわざわざ外に出なくても十分楽しめることが出来るということであろう。新しい場所に慣れるのに時間がかかったとも思えるが。そして、その場に慣れ、十分楽しむことが出来、その場所を自分のものとした時、その場所から自ら出ることを試みる。心理的壁と物理的壁を破る往復運動があり²⁾、そしてついに自ら外に出たのである。

そういうことから、私にとって困惑状態における子供との関係は、子供自ら外に出れるような関係であればよいのではないだろうか。今までは、保育者としての私はそんな時、子供と一緒に手をとり、体で動き誘いをかけることによって子供の動きが促されると思い、それに一生懸命、心を注いだ。ところが子供は外に出て自ら動くどころか動かなくなってしまったのである。ということは子供はむしろ静かに安定があり、安全が保たれ、そこに止まっておきたい気持ちを大切にしてくれる方がよいのではないか。そしてそこから自ら出て行くことがはじまるのではないか。それはあたかも母体から赤ん坊が出てくるようでもある。それなら保育者として私は、母親としての動きがとればよいが、先述の通りどうしても実感的に動きを伴うことが出来ない。そうであるなら、Cにとって安全かつ十分楽しむことの出来た、また自分のペースを守ることが出来た“家”としての動きを私はとることは出来ないだろうか。

子供が保育者のもとにべったりくっついている。“抱っこ”をしていることもあるが、そばにいる時もある。また子供自ら保育者から離れ、自ら遊び動き、しばらくしてからまた保育者のもとに戻ってくる。家にいる。家に帰る。子供にとって家とは、安定している場であり、楽しい場であり、助けてもらえる場であり、飢えない場であり、安心して動け、また休息の場であり、それは身体的に内面的に活動し成長していく場でもある。子供にとって、それらの一部でもが、いつも可能である“家”になれることを求めつつ動くことは、子供との関係が僅かなりとも発展につながりはしないだろうか。しかし子供は他のイメージを追いながら動いてくるかもしれない。例えば、母親や父親のように。(前述の他にママー！ パパー！ といって寄って来る子供もいる) 子供に合ったイメージで私も動ければ、じっくりいってよいのかもしれないが、なかなかそういうわけにもいかない。今の私は子供にとって素晴らしい“家”になれることを望みつつ、またそれをふくらませるのが精一杯の感じである。しかし、それをふくらませていけば、直接人間と人間と

のつながりが生れてきそうでもある。なぜなら、そうすることは母性につながっていくことも考えられるからである。

— 趣光 — 保育者である私が“家”になろうとしてから

C の場合

朝来園して余り調子がよさそうでない。他の子供に手を出されてはギャーとわめき、他の保育者が誘いをかけてはギャーとわめき、ついには私の所へ“抱っこー！”とやってきた。立ったままだと疲れることもあり、Cにとってよい“家”になれればいと願いつつ地面に腰をおろす。15分程じっくり“抱っこ”をしていたら「行く！」と言って自ら立ち庭の門の所へ走っていった。そして「公園に行こうよ」と言って門を出た。言葉と行動がこのように調和したのは珍しいことであった。

D の場合 (5歳 女児)

朝来園してすぐDは私の手を引き、砂場につれて行き、私をすわらせる。Dは私の方に向いてひざの上に座る、童謡を歌いながらしばらくしていると自ら砂をいじりはじめ、道具を捜して来て長い時間遊ぶことが出来た。そして途中から私も一緒に入って遊ぶことができ、会話は伴わないが、今までになく一緒に遊んだという感じが抱けた。

B の場合

雨の日が続き、やっと晴れ間が見えた日。久し振りに太陽のもとで遊ぼうとBを外に連れだす。一緒に確実についてきたので安心したのであるが、外にでておもちゃを差しだしたとたん“抱っこ”を要求してきた。砂場にすわり込んで“抱っこ”をする。30分程してから、Bは私の手をほどき、砂場のへりにすわる。こちらも少々疲れたので、他の子供に目を移しながら休む。さて動きだしたBと砂場で遊ぼうとBに目を向けると、先程までいた場所にはBはいなかった。5・6m離れているジャングルジムの方へすり足で歩き出していたのである。無事ジャングルジムまで行けるよう祈りつつ見守る。幸い障害物や人もいなく、また途中ですわり込むこともなく無事たどりつく。

その様子はジャングルジムが歩いていた所にたまたまあったというよりも、目的をもって動いていった感じの方が強かった。目の見えないBに対して、私は動きを誘ったり、場面の移動に必ずついていくが多かったし何回かジャングルジムまで先導して連れていったことはある。Bはジャングルジムを一・二段のぼり体を動かし、そのうちおりて、地面にすわり込み、手足で地

面に錯画を描きはじめた。Bが自ら動き、かつ動きを連続した形で見せたのは私を驚かせた。

焦燥を覚えることが少なくなり、子供が自ら動きだすのを待つのが楽しみになってくる私であるが、その場の私の気持ちの変化をその時の言葉で表わしてみると、

	— 困惑の時 —	— “家” になろうとしてから —
子供が私の所へ来た時	○ “だっこ” が長く続かなければよいが。 ○ こんどはどうやって離そうか	○ 「よく来たね」 ○ 「どうぞゆっくり」
子供がべったり “抱っこ” したり ついてくる時	○ どうしたらよいのか ○ このままでよいのか (不安)	○ 「安心して休んでもいいよ」
子供が私から離れていく瞬間	○ やっと離れた。(溜息)	○ 「行っておいで」 ○ 「いつでも帰ってきていいよ」

一方子供の変化を見ると、拒否することが少なくなり一緒にじっくり動けるようになる。また私から離れて自ら動き出すまでの時間が早くなる。以前は私が誘いをかけた物や状況から余り遊ぶことはなかった上に、その動きの時間も長つづきはしなかった。しかし最近同じ子供が、こんなことも出来るのかと思わせる動きや、一つの遊びを長つづきするところなどを見ることが出来る。

おわりに

子供が生き生きしているのを見ることは、子供自ら始めたことを大切にしたり、鮮かに見ることが出来る。グズっている子、抱っこを執拗にせがむ子でも、自ら動き生き生きした面を見せる、それは彼等にとって必要な、自ら動くためのエネルギーを貯えるべく“抱っこ”に代表されるような接触が十分になされた時、つまり、“家”としての保育者のもとでゆっくり十分に過す(過し方は子供によって違う)ことが出来ると思われ、自ら動き出して行く。そしてその動きは、保育者が誘いをかけた時の動きより数倍も生き生きしているのである。

文 献

1. 津守真編 知恵遅れの幼児の教育 慶応通信 1974
2. 津守真 発達経験 (依田新, 東洋編 児童心理学 63~78頁) 新曜社 1970
3. バシュラール 大地の休息と夢想 思潮社 1970 (Gaston Bachelard: La terre et les rêveries du repos, Librairie José Conti, Paris 1963)